

# 河井荃廬旧蔵印譜典籍刻印目録稿

List of albums of seal marks, books and seals once belonging to Senro Kawai

権田 瞬 一

Shunichi Gonda

## はじめに

河井荃廬（一八七一—一九四五）は明治大正昭和の三代にわたり日本の書壇印壇に傑出した存在として君臨し、その進むべき指針をさし示した。荃廬は印人としての業績もさることながら、金石法帖、書画珍籍の大収蔵家としての一面も持つ。しかし、その稀観の書画と万巻の書籍は昭和二十年三月十日の東京大空襲によって、荃廬と運命を共にしてしまふ。

筆者は『大東書道研究18』（大東文化大学書道研究所、二〇一一年三月）において、この焼失した収蔵品の中から中国書画に焦点を当て、「河井荃廬旧蔵中国書画目録稿」を発表し、管見の限りで書一八〇点、画三一六点、計四九六点を示し、作者名及び作品名、本または款識、掲載書名を明らかにした。

本稿はこの続編として、印譜と書籍、刻印を調査の対象とする。

前稿同様、本稿も主に戦前の出版物や特陳目録等を渉猟し、河井荃廬（別称）蔵と明記のあるものや当時荃廬と関わった先人たちの述べから抽出し目録化を進めていく。

併せて、旧稿及び本稿作成を通して得た知見をもとに、荃廬の人間像に迫ってみたい。

## 荃廬の学殖

荃廬の篆刻芸術における高い業績は周知のところだが、学術文化面における功績は多方面にわたる。実際に書壇印壇の枠を越えた日中の文化人たちからは、以下のような認識を持たれていたことが伺える。

一、「金石碑板の学に於ては方今刻者（荃廬）の右に出づるもの莫し。……小学の書を渉猟耽読すること刻者の如きは稀に見る所也。」（樋口勇夫『七十二候印存』郁文堂、一九二二年）

一、「金石学者」「書の鑑賞家」

(野本白雲「編輯より配本迄」『書道全集』 第八巻添付「書道月報」第一号、平凡社、一九三〇年)

一、「蔵書万巻、小学説文金石書類に於ては何人の追隨をも許さない」(田中慶太郎「唐本商の変遷」反町茂雄編『紙魚の昔がたり』訪書会、一九三四年)

一、「民間の文字学者」

(神田喜一郎「敦煌学五十年」二玄社、一九六〇年)

一、「大物」「金石書法の学に博洽透徹の造詣を有してをられた」

(石田幹之助「書苑」創刊の頃」藤原楚水著『図解書道史』第

二巻 月報、省心書房、一九七一年)

一、「日本でも有名な漢学者」

(殷麈著・さねとうけいしゅう訳『郭沫若日本脱出記』第一書

房、一九七九年)

また、呉昌碩は荃廬の甲骨文に対する知識について「日本河井最詳」(田口二州「荃廬先生事ども」(2)『書品14』所収)と称揚し、会津八一は日本金石史に関する文献の収蔵は荃廬が「第一」で八一が二番目であったと語っている(吉池進『会津八一伝』会津八一先生伝刊行会、一九六三年)。

## 荃廬の蒐集

荃廬の中国書画の収蔵品及びその蒐集については旧稿を参照されたい。本章では、書画以外の収蔵品について概要を述べる。

先ず、印譜の蒐集について。印譜は性質上、書誌において紹介されることは少なく、今回荃廬蔵と確認の取れた印譜は二十九点に止まった。しかし、荃廬の浙派にはじまり鄧派を根幹とした古典に根差した刻印姿勢から推して、実際には他にも清人の印譜を多数収蔵していたのではないだろうか。また、古銅印譜の蒐集については太田孝太郎の著書に十四点挙げられているが、『古銅印譜拳隅』では稀観本以外は一々所蔵者を明らかにしていないため、今回抽出した以外にも相当数あったものと思われる<sup>①</sup>。

蔵書については説文関係が際立つ。荃廬は狩谷掖齋以来の古い歴史を持つ説文会を重野安釋博士と図って再興し、林泰輔、高田竹山らと吉金文会を設立するなど文字学に対する造詣は深い<sup>②</sup>。勿論その蔵書は小学類に偏ることなく、漢籍から和刻本、一般の書籍に至るまで多岐にわたる。そのため、荃廬は書誌学にも通じ、同じ本でも各種の版本についてどんな微細な相違でも記憶していたという。万巻の蔵書によって蓄えられた荃廬の知識は前述のような評価を呼び、その名声は羅振玉や郭沫若、王一亭といった中国の学者文人たちに

も及んだ。蔵書の中には珍籍も多く、所蔵する漢籍版本を本地中国から求められ翻刻出版することもあった。<sup>③</sup>このような荃廬の博識と蒐集は、自ら古書市等に足繁く通う行動力とともに「文求堂」主人、田中慶太郎（一八八〇—一九五二）の存在が大きい。慶太郎は内藤湖南や郭沫若、長澤規矩也や川瀬一馬等も頼った博学多識で、内山書店つまり内山完造と並称された中国通であった。荃廬とは同郷で若年時からの知友ということもあり、渡清の際には同行するなど互いに益するところも大きかった。田中は更に採り上げるべき人物と考えるが、紙面の都合上、今後別稿を期したい。

蔵印は、師である呉昌碩や呉讓之、趙之謙、徐三庚、若年時に学んだ浙派の趙次閑の刻印が多い。これらの蔵印は第一回東方書道展の際、収蔵の書画とともに特別出陳し、書画は『東方書選』（晩翠軒、一九三三年）、刻印は原鈴で『東方印選』（東方書道会、一九三二年）として刊行され確認できる。また、戦災による荃廬急逝直後、西川寧ら近親者の手によって自邸の焼跡から捜し出された刻印を成譜した印譜も存在する。<sup>④</sup>本稿ではこれらの印譜中から生井子華旧蔵、河野隆先生現蔵の『先師何先生旧蔵銅印』『継述堂旧蔵印』<sup>⑤</sup>を主とし列記した。

最後に、荃廬旧蔵と断定できる資料が少ないため、今回の目録からは外したが、荃廬は拓本の収蔵にも優れていたことを付記してお

きたい。荃廬蔵拓を多数掲載するものに『増訂寰宇貞石図』がある。本書は楊守敬の『寰宇貞石図』を底本とし、河井荃廬監修・藤原楚水纂輯で収載点数は四三七点。そのほとんどは荃廬の蔵拓で、三井聴冰閣からも借写し増補改訂、解説を加えた。このような荃廬の拓本蒐集における鑑識眼は三井家の指南役として迎えられることになり、多くの拓本の仲介にかかわる。<sup>⑥</sup>

以上のように、中国文化博渉の知識に基づく蒐集姿勢と優れた鑑識眼は当時の蒐集家たちの知るところとなり、三井家以外にも、高島菊次郎、山本悌二郎等のコレクション形成にも助言を与えていた。

### 調査資料

本稿において調査の対象とした河井荃廬（別称含む）（旧）蔵と明記もしくは明言する書籍を以下に掲げる。【印譜】【典籍】【刻印】【共通】に分類し、各書誌情報に加え、書名の〈簡称〉とその掲載点数も記す。原本に当たる場合はこの〈簡称〉を参照されたい。

#### 【印譜】

- 太田孝太郎編『古銅印譜萃隅』（文求堂、一九三四年）〈萃隅〉14点  
藤原楚水編『完白山人篆刻偶存』（三省堂、一九四二年）〈偶存〉1点  
藤原楚水編『書苑』（三省堂、一九三七—一九四四年）〈書苑〉1点

太田孝太郎編『古銅印譜目録』（太田氏楓園、一九六一年）〈目録〉 9点  
 太田孝太郎編『古銅印譜孺補遺』（小林庸浩、一九六九年）〈補遺〉 1点  
 大正印会編『大正印会同人印譜』第一冊―第八冊  
 （大正印会、一九二四―一九二五年） 〈大正〉 3点  
 中西慶爾著『書とその風土』（木耳社、一九六八年） 〈中西〉 1点  
 小林斗盦〈補記〉

（横田実著『中国印譜解題』二玄社、一九七六年 所収） 〈解題〉 1点  
 西川寧「師慎軒詩文」（謙慎書道会編『吳讓之の書画篆刻』二玄社、一九七八年 所収）『西川寧著作集』九卷 所収） 〈師慎軒〉 1点  
 小林庸浩「荃廬先生の遺墨」（『拳隅』の抜粋のため簡称省略） 14点  
 （西川寧編『河井荃廬の篆刻』二玄社、一九七八年 所収）  
 小林斗盦「完白山人の篆刻と印譜」  
 （『鄧石如の書法とその系譜展』読売新聞社、一九九一年 所収） 〈系譜展〉 1点  
 『芙蓉先生百五十年祭 展観品目録』  
 （一九三三年／神野雄二『高芙蓉の篆刻』木耳社、一九八八年 所収） 〈芙蓉先生〉 1点

【典籍】

説文会『説文会臨時大会出品略目』（説文会、一九〇八年）〈説文〉 231点  
 丹羽正長↓井上清秀↓松田南溟編『談書会誌』↓『談書会集帖』  
 （談書会、一九〇九―一九二七年） 〈談書会〉 15点

西川寧「河井荃廬先生のこと」（『書品78』東洋書道協会、一九五七年／  
 『西川寧著作集』第五巻 所収） 〈西川〉 3点  
 松丸東魚「河井先生の思い出（4）」（『印奴5』白紅社、一九五九年／  
 『東魚文集』白紅社、一九七七年 所収） 〈松丸〉 1点

【刻印】

『一刀萬象社印選』第一―第七  
 （一九一八―一九二〇年、野中穎僊氏蔵本） 〈一刀〉 11点  
 東方書道会編『東方印選』  
 （東方書道会、一九三二年、成田山書道美術館蔵本） 〈東方〉 14点  
 東方書道会編『東方印選 第二集』  
 （東方書道会、一九三三年、成田山書道美術館蔵本） 〈東方二〉 15点  
 下中彌三郎編『書道全集』第廿七巻（平凡社、一九三二年）〈全集〉 12点  
 謙慎書道会編『吳昌碩のすべて』（二玄社、一九七七年）〈すべて〉 12点  
 『先師何先生旧蔵銅印』（一九四五年、河野隆先生蔵本） 〈古銅印譜〉 19点  
 『継述堂旧蔵印』（一九四五年、河野隆先生蔵本） 〈旧蔵印〉 68点  
 西川寧編『一金蝶堂遺墨』  
 （晩翠軒、一九四六年／覆刻、二玄社、一九七九年） 〈二金〉 4点

【共通】

『趙搗叔先生遺作展覽会 陳列目録』

(一九四二・東京美術館)

〔遺作展〕 13点

〔書苑〕 六一―一二、三省堂、一九四二年 所収／『西川寧著作集』第三卷

所収)

〈河井荃廬旧蔵印譜典籍刻印目録稿〉

凡例

一、本目録は、河井荃廬（別称含む）(旧) 蔵と明記された印譜と典籍、刻印を整理目録化したものである。

一、【印譜】「中国古銅印譜」「中国近人印譜」「日本印譜」、【典籍】「中国」「日本」、【刻印】「古印」「石印」からなる。

一、原典検索の便を図り、掲載書名(簡称)に巻数(一―号数)またはページ数を記す。巻数、号数は漢数字、ページ数は算用数字で記す。

一、蔵品の掲出順序は、編年もしくは作者の生卒、または原典での配列順に従う。

一、【印譜】、【典籍】の書誌情報は原典の記載に従う。ただし、原典において空欄の場合は補填し、明らかな誤植は訂正した。

一、【刻印】の积文で解読の困難な文字は□で示す。

【印譜】

〔中国古銅印譜〕

續古印式 黄錫蕃蔵印 二卷二本 乾隆六十年 〈解題〉〈拳隅三〉

蓮湖集古銅印 王蓮湖蔵印 不分卷四本 乾隆六十年 〈拳隅三〉〈目録20〉

銅壺書堂蔵印 查禮蔵印 四卷四本 嘉慶四年 〈拳隅四〉

雅雨樓銅印譜 潘毅堂蔵印 不分卷四本 嘉慶間 〈拳隅四〉〈目録21〉

古銅印選 郭承勲蔵印 三卷二本 道光五年 〈拳隅四〉

清儀閣古印偶存 張廷濟蔵印 六卷六本 道光八年 後印本

聽颿樓古銅印彙 潘季彤 不分卷三本 道光十二年 〈拳隅四〉〈目録21〉

清吟閣集古印隅 瞿世瑛 不分卷六本 道光間 〈拳隅四〉〈目録21〉

雙虞壺齋印存 吳式芬 不分卷六本 道光間初印本 〈拳隅四〉〈目録22〉

古銅印譜 汪鋆輯印 不分卷三本 同治間 〈拳隅五〉〈目録21〉

漱秋館漢印存 陳承裘蔵印 不分卷四本 光緒四年 〈拳隅六〉

印郵 高文翰蔵印 不分卷二本 光緒十一年 〈拳隅六〉

千鉢齋古鉢選 吳大澂蔵印 不分卷五本 光緒間 〈拳隅七〉〈目録24〉

稽庵古印箋 孫文楷蔵印 四卷四本光緒間 〈拳隅七〉

吉金齋古銅印譜 六卷統一卷 何昆玉輯 〈拳隅七〉

封泥攷略十卷 吳式芬、陳介祺同輯 〈說文28〉

封泥攷略十卷 吳式芬、陳介祺同輯 〈說文28〉

〔中國近人印譜〕

趙凡夫先生印譜 十二卷十二本 趙宦光摹 乾隆十年 〈補遺〉〈目錄20〉

四香堂摹印 二卷二本 巴慰祖摹 乾隆三十九年 〈目錄20〉

完白山人篆刻偶存 一本 鄧石如刻 陳寄舫輯 道光二十六年

〈承譜展〉〈偶存〉〈書苑一—二—三〉

二金蝶堂印稿 二本 趙之謙刻 魏稼孫印拓

二金蝶堂印存 一本 趙之謙刻 沈毓慶編次

二金蝶堂印譜 八本 趙之謙刻 觀自得齋本

悲盦印牘 二本 趙之謙刻

存幾希齋印存 四卷 陳克恕

紅蕙山房藏印譜 二卷 袁廷樞

〔日本印譜〕

燕間清賞 一本 葛之琴刻

聽水閣藏古銅印稿不分卷 三井氏藏印

【典籍】

〔中國〕

說文解字卅卷

平津館本

〈說文1〉

同

一篆一行本

〈說文1〉

說文繫傳校錄十五卷

清 王筠撰

〈說文2〉

說文解字注十五卷六書音均表五卷 小畑行簡訓點本 和板

〈說文2〉

段氏說文注訂八卷

清 鈕樹玉撰

〈說文2〉

說文通訓定聲補遺一卷

清 朱駿聲撰

〈說文3〉

六書類纂八卷

清 吳錦章撰

〈說文3〉

說文徐氏新補新附攷一卷

清 錢大昭撰

〈說文3〉

說文新附攷六卷續一卷

清 紐樹玉撰

〈說文3〉

說文新附攷六卷

清 鄭珍撰

〈說文3〉

說文徐氏未詳說一卷

清 許桂召祥撰

〈說文3〉

說文逸字二卷附一卷

清 鄭珍撰

〈說文3〉

說文逸字弁証二卷

清 李楨撰

〈說文3〉

說文佚字輯說四卷

清 王延鼎撰

〈說文3〉

附字義鏡新一卷

清 王延鼎撰

〈說文3〉

汲古閣說文訂一卷

清 段玉裁撰

〈說文3〉

說文校訂本二卷

清 朱士端撰

〈說文3〉

說文字源一卷

元 周伯琦撰抄本

〈說文4〉

說文字源韻表二卷

清 胡重撰

〈說文4〉

說文提要一卷

清 陳建侯撰

〈說文4〉

說文揭原二卷

清 張行孚撰

〈說文4〉

讀說文記一卷

清 許槿撰

〈說文4〉

讀說文雜識一卷	清	許棫撰	〈說文4〉	說文統釋序注一卷	清	錢大昭撰	〈說文7〉
說文管見二卷	清	胡秉虔撰	〈說文5〉	附音同義異辨一卷	清	畢沅撰	〈說文7〉
說文五翼八卷	清	王煦撰	〈說文5〉	六書說一卷	清	江聲撰	〈說文7〉
說文發疑七卷	清	張行孚撰	〈說文5〉	六書淺說一卷	清	鄭知同撰	〈說文7〉
說文蒼問疏證六卷	清	醉傳均撰	〈說文5〉	說文檢字二卷	清	毛謨撰	〈說文8〉
說文本經蒼問二卷	清	鄭知同撰	〈說文5〉	說文通檢十六卷	清	黎永椿撰	〈說文8〉
說文引經例辨	清	雷浚撰	〈說文5〉	小學類編	清	李祖望編	〈說文8〉
說文經傳異字釋一卷	清	高翔麟撰	〈說文6〉	惠氏讀說文記	惠練撰	說文校議	姚文田、嚴可均同撰
說文經字正誼四卷	清	郭慶藩撰	〈說文6〉	說文答問	錢大昕撰	說文經字考	陳壽祺撰
六書段借經徵四卷	清	朱駿聲撰	〈說文6〉	六書說	江聲撰	說文釋例	江沅撰
說文經韻十三卷附二卷	清	楊延端撰	〈說文6〉	說文舊音	畢沅撰		
兒笱錄四卷	清	俞樾撰	〈說文6〉	許學叢刻		清	許榘編
說文外編十六卷	清	雷浚撰	〈說文6〉	說文說	孫濟世撰	轉注古義考	曹仁虎選
說文續字彙二卷	清	吾邱衍撰	〈說文6〉	說文訂々	駿可均撰	說文辨疑	顧廣圻撰
說文聲讀表七卷	清	苗夔撰	〈說文7〉	說文學例	陳瑒撰	說文蠡箋	潘奕雋撰
說文聲訂二卷	清	苗夔撰	〈說文7〉	王氏讀說文記	王念孫選	讀說文證疑	陳詩庭撰
說文審音十六卷	清	張行孚撰	〈說文7〉	新附考校正	王筠撰		
說文解字旧音一卷	清	畢沅撰	〈說文7〉	爾雅注疏十一卷		單疏本	
說文雙聲疊韻一卷	清	鄧廷楨撰	〈說文7〉	爾雅音圖三卷	晉	郭璞撰	〈說文10〉
說文雙聲一卷疊韻二卷	清	劉熙載撰	〈說文7〉	爾雅古義二卷	清	胡承珙撰	〈說文10〉

爾雅翼卅二卷	宋 羅願撰	《說文 11》	疊雅十三卷	清 史夢蘭撰	《說文 13》
小爾雅義證十三卷補一卷	清 胡承珙撰	《說文 11》	蒼頡篇三卷	清 陳其榮輯	《說文 13》
小爾雅疏證五卷	清 葛其仁撰	《說文 11》	急就篇補注四卷	明 王應麟撰	《說文 14》
小爾雅約注一卷	清 朱駿聲撰	《說文 11》	小學鉤沈十九卷	清 任大椿撰	《說文 14》
方言十三卷	漢 楊雄撰	《說文 11》	小學鉤沈續編八卷	清 顧震福撰	《說文 14》
續方言二卷	清 杭世駿撰	《說文 11》	復古編二卷	宋 張有撰	《說文 14》
續方言又補二卷	清 徐乃昌撰	《說文 12》	附復古編校正一卷附一卷	清 葛鳴陽撰	《說文 14》
釋名八卷	漢 劉熙撰	《說文 12》	六書故卅三卷	宋 戴侗撰	《說文 14》
釋名疏證八卷	清 畢沅撰	《說文 12》	原本玉篇零本三卷	梁 顧野王撰	《說文 15》
附補釋名一卷續釋名一卷	清 畢沅撰	《說文 12》	同	高山寺本	《說文 15》
積名疏證校義一卷	清 吳翊寅撰	《說文 12》	同	神宮本	《說文 15》
釋名補証一卷	清 成蓉鏡撰	《說文 12》	同言部語部	影鈔本	《說文 15》
廣雅十卷	魏 張揖撰	《說文 12》	大廣益會玉編卅卷	寬永年刊本	《說文 16》
續廣雅三卷	清 劉燦撰	《說文 12》	龍龕手鑑四卷	遼釋行均撰	《說文 16》
埤雅廣要四十二卷	明 牛衷撰	《說文 12》	三台海篇正宗廿卷	明 余象斗校訂	《說文 16》
別雅五卷	清 吳玉搢撰	《說文 12》	四庫全書辨正通俗文字一卷	清 黃培芳撰	《說文 17》
別雅訂五卷	清 許瀚撰	《說文 12》	字學舉隅一卷	清 龍啓瑞撰	《說文 17》
拾雅注廿卷	清 夏味堂撰	《說文 13》	正字略定本一卷	清 玉筠撰	《說文 17》
支雅二卷	清 劉燦撰	《說文 13》	重文二卷補一卷	清 丁午撰	《說文 17》
說雅一卷	清 朱駿聲撰	《說文 13》	六經正誤六卷	宋 毛居正撰	《說文 18》



班馬字類五卷	宋 婁機撰	〈說文18〉	五韻論二卷	清 鄒漢勳撰	〈說文21〉
經典文字辨證五卷	清 畢沅撰	〈說文18〉	屈子正音三卷	清 方績撰	〈說文21〉
群經四書字詁百五十卷	清 段諤廷撰	〈說文18〉	古音類表九卷	清 佺壽彫撰	〈說文21〉
經傳釋詞十卷	清 王引之選官板	〈說文18〉	叶韻攷正十六卷	清 朱履仲撰	〈說文21〉
經詞衍釋十卷補一卷	清 吳昌瑩撰	〈說文18〉	毛詩韻訂十卷	清 苗夔撰	〈說文21〉
群經音辨七卷	宋 賈昌朝撰	〈說文18〉	四音定切四卷	清 劉熙載撰	〈說文21〉
九經補韻附攷證一卷	宋 楊伯岳撰 清 錢侗考證	〈說文18〉	古今韻準一卷	清 朱駿聲撰	〈說文21〉
十三經音略十三卷	清 周春撰	〈說文18〉	韻府鉤沈五卷	清 雷浚撰	〈說文22〉
重修廣韻五卷	官板	〈說文19〉	古今中外音韻通例不分卷	清 胡垣撰	〈說文22〉
韻補五卷正五卷	宋 吳棫撰 清 顧炎武正	〈說文19〉	一切經音義廿五卷	唐釋 玄奘撰 黃檗板	〈說文22〉
古今韻會卅卷	元 熊忠撰	〈說文19〉	同	清 孫星衍等校本	〈說文22〉
四聲等子一卷	作者不詳	〈說文19〉	華嚴經音義四卷	唐釋 慧苑撰 黃檗板	〈說文22〉
奇字韻五卷	明 楊慎撰	〈說文19〉	同	粵雅堂本	〈說文22〉
毛詩古音攷四卷	明 陳第撰	〈說文19〉	一切經音義一百卷	唐釋 慧琳撰	〈說文22〉
屈宋古音義三卷	明 陳第撰	〈說文20〉	統一切經音義四卷	宋釋 希麟撰	〈說文22〉
聲韻叢說一卷韻問一卷	清 毛先舒撰	〈說文20〉	衆經音義隨函錄	晉釋 可洪選 抄本	〈說文23〉
古今韻攷四卷	清 李因篤撰	〈說文20〉	撫古遺文二卷補一卷	明 李登撰	〈說文23〉
漢魏音四卷	清 洪亮吉撰	〈說文21〉	六書分類十二卷	清 傅世珪撰	〈說文23〉
聲類表一卷	清 戴震撰	〈說文21〉	古文原始一卷	清 曹金樞撰	〈說文23〉
古韻論三卷	清 胡秉虔撰	〈說文21〉	續考古圖五卷	宋 呂大防撰	〈說文24〉

求古圖精舍金石圖四卷	清	陳經撰	〈說文24〉	石鼓文定本不分卷	清	古華山農撰	〈說文27〉
曹氏吉金圖二卷	清	曹奎撰	〈說文24〉	石鼓文匯不分卷	清	尹彭壽撰	〈說文27〉
金石索十二卷	清	馮雲鵬撰	〈說文24〉	周秦刻石釋音一卷	元	吾丘衍撰	〈說文27〉
號季子白盤銘考一卷	清	吳雲撰	〈說文25〉	繆篆分韻五卷補十卷	清	桂馥撰原刊本	〈說文28〉
號季子白盤銘考一卷	咸豐年刊本	咸豐年刊本	〈說文25〉	漢印分韻二卷續二卷	清	袁日省 謝景卿撰	〈說文29〉
周誥遺文一卷	清	吳大澂撰	〈說文25〉	竹田秦漢瓦當文存一卷	清	王福田撰	〈說文29〉
嘯堂集古錄考異二卷	清	張蓉鏡撰	〈說文25〉	千覽亭古甄圖釋廿卷	清	陸心源撰	〈說文29〉
歷代鐘鼎彝器款識廿卷	宋	薛尚功撰 明朱謀聖刊本	〈說文25〉	千覽亭古甄錄六卷續四卷	清	陸心源撰	〈說文29〉
歷代鐘鼎彝器款識廿卷	阮元刊本	阮元刊本	〈說文25〉	隸釋廿七卷	宋	洪适撰	〈說文29〉
從古堂款識學十六卷	清	徐同柏撰	〈說文25〉	隸續廿一卷	宋	洪适撰	〈說文29〉
長安獲古編不分卷	清	劉喜海撰	〈說文25〉	隸釋刊誤一卷	清	黃丕烈撰	〈說文29〉
兩齋軒彝器圖釋十二卷	清	吳雲撰	〈說文26〉	隸韻十卷考證一卷	宋	劉球撰	〈說文29〉
恒軒吉金錄不分卷	清	吳大澂撰	〈說文26〉	漢隸字原六卷	宋	婁機撰	〈說文29〉
奇觚室吉金文述廿卷	清	劉心源撰	〈說文26〉	漢隸分韻七卷	清	李桂史撰	〈說文29〉
說文古籀疏證六卷	清	莊述祖撰	〈說文26〉	隸法彙纂十卷	清	項懷述撰	〈說文30〉
說文古籀補十四卷附錄一卷	乙未年增輯本	乙未年增輯本	〈說文26〉	金石文字辨異十二卷	清	邢澍撰	〈說文30〉
字說一卷	清	吳大澂撰	〈說文26〉	碑別字五卷	清	羅振鋆撰	〈說文30〉
古籀拾遺三卷附一卷	清	孫詒讓撰	〈說文26〉	碑別字補五卷	清	羅振玉撰	〈說文30〉
石鼓文定本二卷	清	劉凝撰	〈說文27〉	集古錄十卷	宋	歐陽修撰	〈說文30〉
石鼓文纂積一卷	清	趙烈文撰	〈說文27〉	金石錄卅卷	宋	趙明誠撰	〈說文30〉

金石存十五卷	清	吳玉搢撰	〈說文30〉	銅熨斗齋隨筆八卷	清	沈濤撰	〈說文35〉
兩漢金石記廿二卷	清	翁方綱撰	〈說文30〉	雙硯齋筆記五卷	清	鄧廷楨撰	〈說文35〉
留真譜第三小学部	清	楊守敬撰	〈說文31〉	蛾術篇二卷	清	王筠撰	〈說文35〉
六藝論一卷	漢	鄭玄撰	〈說文32〉	臆說一卷	清	王筠撰	〈說文35〉
群經字攷十卷	清	吳東發撰	〈說文33〉	印林遺著一卷	清	許瀚撰	〈說文35〉
群經平議十卷	清	俞樾撰	〈說文33〉	攀古小廬文一卷補一卷	清	許瀚撰	〈說文35〉
茶香室經說十六卷	清	俞樾撰	〈說文33〉	寒秀草堂筆記四卷	清	姚衡撰	〈說文35〉
劉貴陽說經殘本一卷	清	劉書年撰	〈說文33〉	舒藝室隨筆六卷續一卷經筆三卷	清	張文虎撰	〈說文35〉
吳氏遺著五卷	清	吳凌雲撰	〈說文33〉	讀書雜釋十四卷	清	徐鼎撰	〈說文36〉
句溪雜著五卷	清	陳立撰	〈說文33〉	讀書偶識八卷	清	鄒漢勳撰	〈說文36〉
尚書隸古定釋文八卷	清	李遇孫撰	〈說文33〉	古書疑義舉例七卷	清	俞樾撰	〈說文36〉
周書勦補四卷	清	孫詒讓撰	〈說文34〉	古文苑廿一卷	宋	章樵注	〈說文36〉
諸氏平議卅五卷	清	俞樾撰	〈說文34〉	續古文苑廿卷	清	孫星衍撰	〈說文36〉
文選古字通疏證六卷	清	薛傳均撰	〈說文34〉	觀古閣叢稿五卷	清	鮑康撰	〈說文46〉
通雅五十二卷	明	方以智撰	〈說文34〉	遺筐錄八卷	清	秦寶瓚撰	〈說文46〉
字詁義府合按三卷	清	黃生撰	〈說文34〉	書史會要十卷	明	陶宗儀撰	〈談書會十九〉
鍾山札記四卷龍城札記四卷	清	盧文弨撰	〈說文34〉	漢碑錄文四卷	清	馬邦玉撰	〈談書會十九〉
十駕齋養新錄廿卷余錄三卷	清	錢大昕撰	〈說文34〉	鳳野殘帖釋文一卷	清	錢大昕撰	〈談書會十九〉
證俗文十八卷	清	郝懿行撰	〈說文35〉	虛舟題跋十卷	清	王澐撰	〈談書會二十〉
炳燭編四卷	清	李麇芸撰	〈說文35〉	古墨齋金石跋六卷	清	趙紹祖撰	〈談書會二十一〉

隸韻十卷	清 劉球撰	《談書會二十二》
隸韻考證一卷	清 翁方綱撰	《談書會二十二》
獨笑齋金石略四卷	清 鄭業敦撰	《談書會二十二》
法書要錄十卷	清 張彥遠撰	《談書會二十三》
淳化閣帖釋文二卷	清 翁方綱撰	《談書會二十九》
歷代石經畧二卷	清 張國淦撰	《談書會二十九》
釋字百韻一卷	清 陳勵撰	《談書會二十九》
獨笑齋金石略四卷	清 鄭業敦撰	《談書會二十九》
印談	清 沈從先撰	《西川》
多野齋印說	清 董小池撰	《西川》
權衡度量實驗考	清 吳大澂撰	《松丸》《西川》
悲盦居士詩贖 一本	清 趙之謙	《遺作展》
悲盦居士文存 一本	清 趙之謙	《遺作展》
悲盦居士四書文 一本	清 趙之謙	《遺作展》
補寰宇訪碑錄 二本	清 趙之謙	《遺作展》
仰視千七百二十九鶴齋叢書	清 趙之謙	《遺作展》

〔日本〕

說文解字序一卷	平田鉄胤刊本	《說文36》
六書訓蒙編一卷	釋慶忍撰	《說文37》

【刻印】

文字源流標例八条二卷	釋德龍撰	《說文37》
千字異同攷一卷	釋默隱撰	《說文38》
貫雅一卷	深谷亨選抄本	《說文38》
漢篆千字文四卷	曾之唯編	《說文39》
新撰字鏡二卷	群書類聚本	《說文39》
倭爾雅八卷	貝原好古撰	《說文40》
倭玉篇文通考四卷	新井君美撰	《說文40》
別體字類二卷	萩原鞏撰	《說文40》
楷法辨體二卷	小此木包之撰	《說文40》
經史莊岳音一卷	釋文雄撰	《說文40》
經解秘藏三卷	寺尾正長撰	《說文41》
日本靈異記考證三卷	狩谷望之撰	《說文42》
皇朝金石編四卷	藏春園主人撰	《談書會二十》
十七帖說鈔	津田鳳鄉撰	《談書會三十三》
筆意斷	源周義撰	《談書會三十三》
松秀園書談	増山雪齋撰	《談書會三十三》

〔古印〕

肖□□	《古銅印譜》
-----	--------

朱得臣	〔古銅印譜〕	国和堂弘農網記	明	劉諭鄉	〔一刀七〕	〔全集11〕
千秋	〔古銅印譜〕	繼志述事之寶	明		〔全集13〕	
尚長子印	〔古銅印譜〕	大清受命之寶	清		〔全集14〕	
鄭守私印	〔古銅印譜〕					
覃恁	〔古銅印譜〕	〔石印〕				
孫□私印	〔古銅印譜〕	陳啓湘印	清	胡唐	〔長庚〕	〔東方〕
□□之印	〔古銅印譜〕	少韓	清	胡唐		〔東方〕
沮秘	〔古銅印譜〕	張野	清	胡唐		〔東方〕
□・□(兩面印)	〔古銅印譜〕	得少佳趣	清	徐年	〔漁莊〕	〔東方〕
權	〔古銅印譜〕	竹田深處	清	文鼎	〔後山〕	〔全集15〕
密流惹恨多	〔古銅印譜〕	蔓秋華館	清	陳鴻壽	〔曼生〕	〔東方〕
三元及弟壽當朝	〔古銅印譜〕	馮成私印	清	陳鴻壽		〔全集15〕
苔玉之印	〔古銅印譜〕	亞聖卒孫	清	楊澥	〔龍石〕	〔旧藏印〕
李氏星階	〔古銅印譜〕	前度劉郎	清	楊澥		〔旧藏印〕
甬鴻私印	〔古銅印譜〕	願華長好月長圓人長壽	清	趙之琛	〔次閑〕	〔東方〕
任憲印	〔古銅印譜〕	永受嘉福	清	趙之琛		〔東方〕
降廣漢印	〔古銅印譜〕	梅卿白事	清	趙之琛		〔東方〕
張□花押	〔古銅印譜〕	字聖泉號友梅	清	趙之琛		〔東方〕
五面印	〔全集11〕	同準私印	清	趙之琛		〔東方〕
六面印	〔全集11〕	執生	清	趙之琛		〔東方〕

周叔芳氏	清	趙之琛		梅邊吹簫詞人	清	吳讓之		〈師慎軒〉〈旧藏印〉
又蘭	清	趙之琛	〈東方二〉〈旧藏印〉	康保長壽樓	清	吳讓之		〈旧藏印〉
定香亭	清	趙之琛	〈東方二〉〈旧藏印〉	三退樓寓公	清	吳讓之		〈旧藏印〉
次舟	清	趙之琛	〈東方二〉〈旧藏印〉	合同	清	江尊(西谷)		〈旧藏印〉
菘中	清	趙之琛	〈東方二〉	鋒鏑餘生	清	胡震(鼻山)		〈東方〉〈旧藏印〉
李承恕印	清	趙之琛	〈東方二〉〈旧藏印〉	陳彭壽樂未央大富貴	清	陳雷(震叔)		〈二刀四〉
純道士	清	趙之琛	〈東方二〉〈旧藏印〉	甘棠坡農	清	陳雷		〈二刀六〉
紅杏江南	清	趙之琛	〈東方二〉〈旧藏印〉	翠蔭軒	清	王爾度(頃波)		〈旧藏印〉
水墨清華	清	趙之琛	〈東方二〉〈旧藏印〉	杏樵翰墨	清	王爾度		〈旧藏印〉
彭城世胄	清	趙之琛	〈東方二〉〈旧藏印〉	趙摛叔	清	趙之謙(摛叔)		〈二金〉〈旧藏印〉〈遺作展〉
芝農	清	趙之琛	〈東方二〉〈旧藏印〉	魏錫曾收集模拓之記	清	趙之謙		〈二金〉〈旧藏印〉〈遺作展〉
半竿落日兩行新雁一葉扁舟	清	嚴坤(粟夫)	〈二刀四〉	鄭齋	清	趙之謙		〈二金〉〈旧藏印〉〈遺作展〉
廉援居士	清	周濟(保渚)	〈旧藏印〉	頤伯近作	清	趙之謙(二金)		〈旧藏印〉〈遺作展〉〈全集15〉
德而天祐志无不利	清	翁大年(叔鈞)	〈旧藏印〉	禾畧室	清	江標(建霞)		〈旧藏印〉
長宜子孫	清	楊與泰(辛庵)	〈旧藏印〉	治安	清	徐三庚(辛穀)		〈旧藏印〉
觀海者難為水	清	吳讓之(熙載)	〈全集16〉〈旧藏印〉	子安	清	徐三庚		〈旧藏印〉
子京秘玩	清	吳讓之	〈東方〉〈全集15〉〈旧藏印〉	樞湄	清	徐三庚		〈旧藏印〉
長丙炎印	清	吳讓之	〈東方〉〈旧藏印〉	徐中立日利	清	徐三庚		〈旧藏印〉
午橋	清	吳讓之	〈東方〉〈旧藏印〉	錫瑗長壽	清	徐三庚		〈旧藏印〉
甘泉談權巽夫画印	清	吳讓之	〈東方〉	常秉雲	清	徐三庚		〈旧藏印〉

生于戊午	清	徐三庚	〈旧蔵印〉
伯敏所作	清	徐三庚	〈旧蔵印〉
純保	清	徐三庚	〈旧蔵印〉
貴芳	清	徐三庚	〈旧蔵印〉
謝楨私印	清	徐三庚	〈一刀七〉
恣齋	無款		〈旧蔵印〉
石昌林印	清	徐新周 (星舟)	〈旧蔵印〉
熾君	清	徐星州	〈旧蔵印〉
陶寫	清	吳昌碩 (缶廬)	〈すべて175〉
兪樾私印	清	吳昌碩	〈東方〉〈すべて175〉
熾君日利	清	吳昌碩	〈東方〉〈すべて175〉
石昌彬印	清	吳昌碩	〈東方〉
汪行忠恕齋	清	吳昌碩	〈全集15〉〈すべて175〉
回岸頭是	清	吳昌碩	〈すべて175〉
園丁墨戲	清	吳昌碩	〈すべて176〉
克己復禮	清	吳昌碩	〈すべて176〉
抱貞天	清	吳昌碩	〈すべて176〉
閔泳翊字立羽	清	吳昌碩	〈すべて176〉
無名之朴	清	吳昌碩	〈旧蔵印〉
子陀	清	吳昌碩	〈旧蔵印〉

獨往	清	吳昌碩	〈旧蔵印〉
子勤	清	吳昌碩	〈一刀六〉
代面	清	吳昌碩	〈一刀五〉
徐氏建本	清	王大斨 (水鏡)	〈一刀五〉
閑邪存誠	清	方若 (葉雨)	〈旧蔵印〉

### 荃廬の残したもの

旧稿「河井荃廬旧蔵中国書画目錄稿」において筆者は各書誌における荃廬表記として、河井(合)荃(荃)廬(廬)、河井仙郎、河井荃生、継述堂、寶書龕(龕・庵)、趙且雪、何蟬巢(叟)、管楷甫を確認した。

一方で、今回の調査における荃廬表記は河井仙郎、河井荃廬、継述堂、獨宜室、何蟬巢を確認した。使い分けとしては、概ね学術的書籍の収蔵は河井仙郎、印譜の蒐集は継述堂、蔵印関係は河井荃廬となっており、研究者としての「仙郎」、印譜の宝庫「継述堂」、書壇印壇人としての「荃廬」と意図して表記していたのではないだろうか。

このように複数の名称を使用しながら収蔵品の公開に努めていた

荃廬であるが、旧来、著書、論文の類はほとんどないと言われ、その高い学殖は同世代に教えを受けたものたちによって語り継がれてきた部分大きい。しかし、本調査を進めていく過程で、荃廬参加の座談会四本と小論十六本、序文二本を確認することができた。<sup>⑧</sup>これらは戦前の定期刊行物十一誌に寄稿されたものだが、このことから荃廬は出版業界と太いパイプがあったことがうかがえる。特に平凡社との繋がりは強く、当時の平凡社の和様の専集を除く全ての書道出版に纂修、監修、編輯顧問として荃廬の名が挙がる。<sup>⑨</sup>

また、「日本新聞」や「日本及日本人」誌上に浜村蔵六（五世）とともに選者として携わっていた、篆刻投稿欄の漢文による評語も見逃せない。<sup>⑩</sup>

その他多くの書籍の監修、もしくは主導をしていた。以下にその主だったものを挙げる。

- 一、『談書会誌・談書会集帖』（談書会、一九〇九—一九二七年）
- 一、『亀甲獸骨文字』全二卷（商周遺文会、一九二二年）
- 一、『大東美術』全十二冊（大東美術振興会、一九二五—一九二七年）
- 一、『書道全集』全二十七卷（平凡社、一九三〇—一九三二年）
- 一、『和漢名家習字本大成』全四十二冊（平凡社、一九三三—一九三五年）

一、『弘法大師真蹟全集』全十八卷（平凡社、一九三四—一九三五年）

一、『和様手本大成』全十二函二十四帖（平凡社、一九三四—一九三五年）

一、『書道全集』（和装）全二十六卷（平凡社、一九三五—一九三六年）

一、『支那名画宝鑑』（大塚巧芸社、一九三六年）

一、『千字文十種』全七函十四冊（平凡社、一九三六—一九三七年）

一、『支那南画大成』（興文社、一九三六年）

一、『国訳書論集成』全十二卷（東学社、一九三七—一九三八年）

一、『支那墨蹟大成』（興文社、一九三八年）

一、『書体大字典』全十二卷（平凡社、一九三九—一九四〇年）

一、『増訂寰宇貞石図』（興文社、一九四〇年）

一、『支那名家墨蹟』全三冊（晚翠軒、一九三四—一九三六年）

一、『清人隸書集』全四冊（晚翠軒、一九三七年）

一、『書苑』全八十四冊（三省堂、一九三七—一九四四年）

右記の書籍以外にも書画の定期刊行物である『書苑』、『書道及画道』、『書勢』、『藝苑』、『美術写真画報』、『詩書画』、『書藝』、『南画鑑賞』、『興亜書報』にて蔵品を公開する等、精力的に出版事業にも協力した。これらの出版物は、当時よりもより現在でも斯界にとつ



て有用なものばかりである。右誌に掲載された荃廬収蔵の書画等は戦火によって焼失し現存していないものばかりだが、印刷物として後世に残せたことは不幸中の幸いであり、荃廬の残した文化遺産と言って良いだろう。

もつとも、前出の刊行物への荃廬の関わり方は著者ではなく、あくまでも監修者としての立場である。しかし、これらの執筆者たちの記述中には荃廬の査読ともいえる影響下のもと、出版に至った経緯や荃廬に対する謝辞等が記されており、荃廬の深い学識が垣間見える。実際に『書苑』の主幹である藤原楚水の原稿は荃廬の眼が隅々にまで行き届き、いつも赤字でいっぱいだったという。樋口銅牛<sup>(1)</sup>（一八六六—一九三二）や三村竹清<sup>(2)</sup>（一八七六—一九五三）も同様の洗礼を受けている<sup>(3)</sup>。

## おわりに

維新後の日本の書流は、明治十三年の楊守敬来日にもなう金石碑版法帖の流入や日本人士の渡清による清人書法の摂取によって、新時代へと突入していく。そんな時流の中、荃廬は日本への中国書法流入を冷静かつ客観的に見極め、形骸化に陥ることなく我が国に浸透させるべく尽力した。とりわけ、趙之謙の作品蒐集には異常な情熱を傾け、「趙之謙逝世六十年記念展」開催や『二金蝶堂遺墨』

出版に代表される趙の顕彰に努め、現代の書壇印壇にも通ずる大きな波を起こしていく。

今一度、荃廬の関わった刊行物や蒐集した作品群を注視し、その鑑識眼や思想、延いては中国書法の本質を探り、斯界の指針とすべきである。

今後は、本稿、旧稿をもとに荃廬の業績を体系化し、日本近代書道史の再考を進めていきたい。旧稿及び本稿が、焼失によって空白になってしまった、荃廬の日中文化交流に果たした偉大な足跡を埋める一助となれば幸いである。

## 〔注〕

(1) 小林庸浩「荃廬先生の遺墨」(西川寧編『河井荃廬の篆刻』二玄社、一九七八年 所収)を参照。

(2) 松丸東魚「吉金文会その他」(『印奴3』白紅社、一九五八年 所収)、神田喜一郎「貝塚教授の『甲骨文字』図版篇を手にして林泰輔博士を憶う」(『敦煌学五十年』二玄社、一九六〇年 所収)に詳しい。

(3) 本稿「調査資料」【典籍】に挙げた西川寧、松丸東魚の随想に具体的な書名と出版に至る経緯が述べられている。

(4) 『乙酉劫餘繼述堂所蔵印譜』、『繼述堂劫餘名印』、『先師何先生旧蔵銅印』、『繼述堂旧蔵印』がある。各々一九四五年に西川寧らによつ

て成譜されたもの。

(5) 河野隆「西川寧先生の印癖」〔書法漢学研究〕第六号、アートライフ社、二〇一〇年 所収)に詳しい。

(6) 富田淳「槐安居コレクションと聴水閣コレクション——高島菊次郎氏と三井高堅氏——」(関西中国書画コレクション研究会編『関西中国書画コレクション』関西中国書画コレクション研究会、二〇一二年 所収)、樋口一貴「三井高堅と聴水閣拓本コレクションの形成」(『聴水閣旧蔵碑拓名帖撰——新町三井家——』三井文庫、一九九八年 所収)に詳しい。

(7) 例外として『談書会誌』の典籍二点と『東方印選』の趙次閑刻印が獨宜室蔵、『書苑』における『完白山人篆刻偶存』が何蟬巢蔵となっている。

(8) ・「書談を読みみて」(『繪畫叢誌』261号東洋絵画会、一九〇九年)  
・「篆刻瑣言 丁敬」(『日本及日本人』第五百二号、政教社、一九〇九年)

・「篆刻瑣言 蔣仁・黄易」(『日本及日本人』第五百三号、政教社、一九〇九年)  
・「篆刻瑣言 奚岡・陳豫鍾」(『日本及日本人』第五百四号、政教社、一九〇九年)

・「篆刻瑣言 陳鴻壽・趙之琛」(『日本及日本人』第五百五号、政教

社、一九〇九年)

・「書画に於ける篆刻の調和」(『日本美術』121号、一九一二年)  
・「宋拓戲魚堂帖」(『繪畫叢誌』289号、東洋絵画会、一九〇九年)  
・富益齋「印章備正」序文(民友社、一九一三年)

・「印章の来歴」(『美術之日本』八ノ三、審美書院、一九一六年)  
・「印章の沿革(中井敬所稿・河井荃廬訂)」(『書道及畫道』一ノ二、書道及畫道社、一九一六年)

・「印章瑣談」(『書画骨董雜誌』113号、書画骨董雜誌社、一九一七年)

・「書・画・篆刻三絶」(『書道』一ノ一、日本書道作振会、一九二八年)

・「篆刻の沿革及現状」(『書道名鑑』(美術日報出版部、一九二八年)年)  
・「翁と十七帖」(『書契』二卷四号・泰麗書道会、一九三二年)

・「書聖弘法大師を語る」(『書藝』第三卷第十号、平凡社、一九三三年)

・「篆刻を語る」(『書藝』第三卷 第十一号、平凡社、一九三三年)  
・「支那趣味座談会」(『書藝』第四卷 第二号、平凡社、一九三三年)  
・「楊守敬を語る座談会」(『書藝』第四卷 第十一号、平凡社、一九三三年)

・「清朝南畫家之一瞥」(『南画鑑賞』第四卷 四月号、南画鑑賞会、

一九三五年)

・「石涛に就いて・疑点二題」(『南画鑑賞』第四卷 十月号、南画鑑賞会、一九三五年)

・孫呂吉謙益原注・茅原東学刪定并訳文『千字文考正』卷頭言二種 (東学社、一九三六年)

・「吳昌碩と王一亭」(『書画骨董雜誌』387号、書画骨董雜誌社、一九四〇年)

(9) 平凡社教育産業センター編『平凡社六十年史』(平凡社、一九七四年)を参照。

(10) 北川博邦「明治末年の篆刻界の一断面 新聞紙上の篆刻欄」(芸術新聞社編『近代日本の書 現代書の源流をたずねて』芸術新聞社、一九八四年 所収)に詳しい。

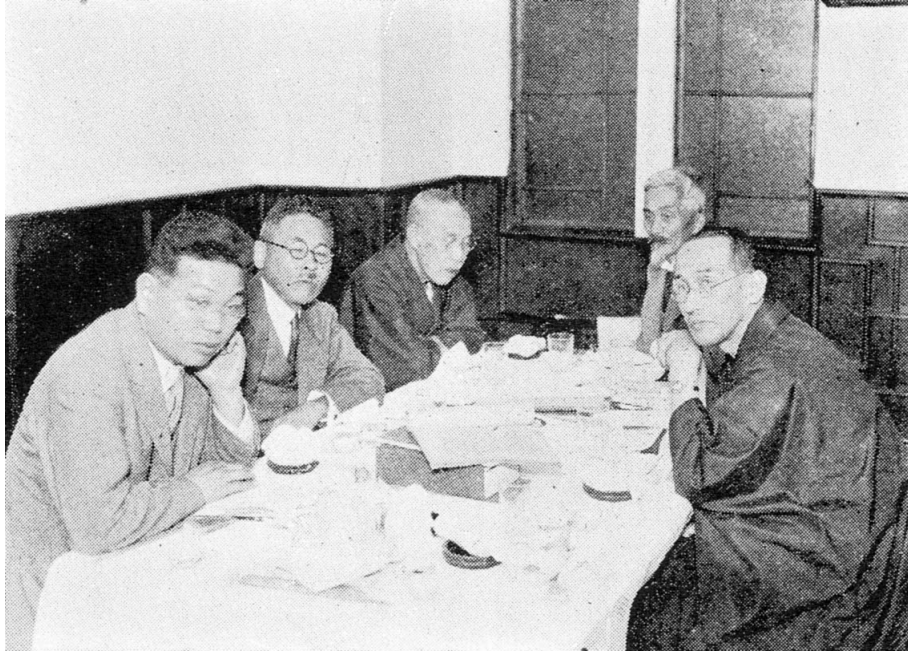
(11) 元朝日新聞編集者で漢学者、金石学者。

(12) 市井の書誌学者。著述も多く、江戸文学に詳しい。

(13) 「学問の思い出―藤原楚水先生を圍んで」(東方学会編『東方學』第六十八輯、一九八四年 所収)、東方学会編『東方学回想』(Ⅲ学問の思い出(1)、刀水書房、二〇〇〇年 再録)、藤原楚水『随筆 藻塩草』(省心書房、一九七三年 再録)を参照。

〔付記〕

本稿を執筆するにあたり、成田山書道美術館、河野隆先生、野中頼僊氏にはご所蔵の貴重な原鈴印譜を閲覧させて頂きました。ここに記して深く謝意を表します。



「楊守敬を語る座談会」(『書藝』第四卷 第十一号、平凡社、一九三三年所収) 右から河井荃廬、梅園方竹、辻香瑠、藤原楚水、野本白雲



「支那南画大成」内容見本(興文社、一九三六年)より  
右から藤原楚水、河井荃廬、原田尾山、日下部道壽  
画の選定及び編輯中の監修者たち